

嘉興李氏世系小考

四〇四

井上充幸

はじめに

筆者はこれまで、明末を代表する書畫骨董の鑑賞家の一人、李日華（二五六五〜一六三五）の平生について、彼の書き残した『味水軒日記』をはじめとする著作に基づき、さまざまな側面からその一端を明らかにしてきた〔井上二〇〇〇〕・〔井上二〇一一〕。

李日華は、その長い生涯の大半を、郷里である浙江の嘉興において過ごしたが、彼が嘉興のどの場所に暮らしていたのかについては、これまでの先行研究においてあまり明確にされてこなかった。のちに述べるように、嘉興における李日華とその一族の主だった居處は、春波・甬里・白苧の三箇所であるが、たとえば「萬二〇〇八」一六頁の圖二に示された地圖中のキャプションでは、白苧のおおよその位置については正しく示されているものの、甬里については白苧から數百メートル離れたどこかにあるとして明示せず、春波の居宅にいたっては嘉興府城の東門（春波門）の内側にある市街地に比定している。また、「濱島二〇一四」は、李日華の父、李應筠（一五三一〜一六一七）の出身地を、嘉興城外の北東に位置する東津村であるとしているが、これについても検討を要する。そもそも地方志には、李日華が晩年を過ごした恬致堂は「春波門外の螺螄濱」にあり、六軒齋や紫桃軒も同じく城外にあったと明白に記されており、^①李日華自らの著述にも、城内に生活據點を置いていたことを明示

する文章は存在しない。そこで本稿では、李日華とその一族が、どのようないきさつで春波・甬里・白苧の三箇所に住居を置くことになったのかを、地方志の記事に即して確認していくこととする。

また、李應筠・李日華父子以前における李氏一族の家系についても、先行研究ではあまり明らかにされていない。李氏をはじめとする嘉興の有力氏族の家系に関する研究には、「潘一九四七」およびこれを大幅に改訂・増補した「龔二〇一一」があるが、やはり李日華が進士に及第して「望族」となって以降の世系の記述が中心であるため、これについてもやはり、居所の變遷とあわせて、李日華自身の著述から可能な限り明らかにしていきたい。

なお、本稿で採り上げる期間は、李氏の始遷祖から第八代の李日華の進士及第の時點まで、すなわち李氏が嘉興の望族となる以前の時期にあたる。李日華が進士に及第して以降、李氏一族を取り巻く社会的・経済的・文化的状況の劇的な變化に伴い、宗族形成の方針や戦略、および居所の持つ意味あいも、やはり大きく變わっていくこととなる。それについては別稿にて扱う豫定であるため、あらかじめご了承いただきたい。

第一章 李氏歴代の事績について

李日華の祖先に關して、詳しいことはあまり明らかとはなっていない。

それは、李日華の一族の家譜が、残念ながら現存していないためである。そのため、李日華が父の喜壽に際して著した「乞言壽家君引」（李日華『恬致堂集』卷二十九「引」所收）が、その数少ない手がかりとなる。なお、李日華の弟子のひとりであり、李日華の一人息子、李肇亨（一五九二～一六六四⁷）の無二の親友でもあった譚貞默（一五九一～一六六六）が、李日華の行状（譚貞默「明中議大夫太僕寺少卿李九疑先生行狀」、李日華『恬致堂集』巻頭所收）を著しているが、冒頭に置かれた李氏の家系の箇所については、この「乞言壽家君引」の内容を踏襲しており、あわせて家譜の存在についても示唆しているため、こちらの記述も参照しつつ、李氏の祖先による嘉興郊外への移住から、府城直近の春波坊に據點を移すまでのいきさつについて概観していくこととしたい。

第一節 雙溪への移住（第一世～第三世）

李日華が五・六歳のころに父から教わった話によれば、李氏の始祖は、北宋末の忠臣として名高い李若水（忠愍公、一〇九三～一一二七）であり、その次子の李淳が南宋の初めに本貫の地である河北の洺州から江南へと移住すると、江蘇から浙江にかけての各地に一族が分枝して居住するようになったという。これは李氏家藏の「先朝の勅」に據るものとされるが、南宋から明代中期にかけての家系については全く不明である⁸。

はじめて嘉興に移り住んだ李氏の始遷祖は、李日華の八世の祖にあたる小宗公（諱や生卒年など不詳）である⁹。小宗公が居宅を構えたのは、甬里街雙溪橋であった。甬里街とは、嘉興府城の東門（春波門）を出てすぐの宣公橋から、六里涇の北岸に沿って東西を走る繁華街であり、その中ほどにある虹涇橋を東に渡った先に位置するのが雙溪橋であった。雙溪とは、嘉興府城の東六里に位置する水上交通の要衝である。ここは、春波門外から東流する六里涇が、平湖縣に至る漢塘¹⁰、および嘉善縣を經由

して江蘇の松江府華亭縣に至る魏塘¹¹という、二つの幹線水路に分岐する地點にあり、それにちなんで「雙溪」、すなわち「二つの水路」と名づけられた¹²。李日華が「魏塘には今に至るまで李村有り」と附記していることから¹³、おそらく小宗公は嘉善縣から魏塘を西に傳つて嘉興へと移住してきた可能性が高い。

小宗公が生きた一五世紀中期以降、江南の太湖周邊、とりわけ江蘇の蘇州・松江、および浙江の嘉興・湖州・杭州にかけての地域では、商業經濟の發展に伴つて客商の活動が盛んとなり、地域間を行きかう物資の量もどんどん増加しつつあった。例えば、甬里街の西端に位置する熙春橋（衙前橋・牙前橋とも）の附近は、一六世紀後半に至つて嘉興城下における最大の物資の集散地となり、多くの商店が立ち並び、市場を目指して近隣のあらゆる地域から客商が集うようになるに至る¹⁴。そのような状況のもと、嘉興と松江を結ぶ船便の經由地であり、甬里街あるいは六里涇を通じて熙春橋の商業區域に直結するなど、商業上のさまざまな機会を得やすい雙溪においても、新來の移住者にとつて、嘉興における生活のための足がかりを得るには有利な環境が整いつつあった。代々農業を營んできたとされる李氏が、小宗公の代になつて農村部から都市部への移住を決意したのも、おそらくさらなる發財の機会を得るためであったと考えられる。

このうち、李氏はこの雙溪を據點として、第二世の李世傑、第三世の李小春と續くが¹⁵、いずれの人物についても詳細は不明である。

第二節 白苧への定着と官位の獲得（第四世～第六世）

李小春の四子のうち、季子にあたる第四世の景芳公（諱や生卒年など不詳）から、少しずつ事績が明らかとなってくる。景芳公は、嘉興の白苧に居住する沈氏と縁組みを行い、これにより「白苧の人」となったとい

う。^① 白苧とは、嘉興府城の東南に廣がる鴛鴦湖（南湖）の對岸、嘉興の名勝として名高い烟雨樓をはさんでちょうど反對側に位置し、風光明媚なこの農村地區には、元末明初の儒學者である徐一夔（一三一九〜一三九九）をはじめ、古くから嘉興ゆかりの名士たちが居宅を築いている。^② 残念ながら、白苧の沈氏については各種資料に記載がなく、詳細については全く不明であるが、あまり有力ならざる無名の一族であったと推測される。そののちの李氏と白苧とのつながり、および李氏が李日華の世代以降に縁組を行った他の複数の沈氏については、後段および別稿にて再び採り上げる。

景芳公と沈氏との間に生まれた第五世の李衍（葵軒公）は、「登仕公」とも稱されるとおり、それまで代々農業にいそしんできた李氏の中で、初めて官位を獲得した人物である。李衍は律學に通じていたことから、推薦によって官位を得た、いわゆる「清吏」であったといふ。^③ 譚貞黙によれば、李衍の肩書きは巡篆、すなわち治安維持などを擔當する巡檢司巡檢であり、廣東の廉州において優れた仕事をなしたといふ。^④ 従九品という最下級の官位であり、あるいは買官によって獲得した肩書であった可能性もあるにせよ、このことは、一六世紀前期に至って李氏の經濟基盤がそれなりに安定し、律學の知識を身につける人物も登場するに至ったことを示している。

續く第六世の李惠（天錫公）は、義を重んじ情に篤く、父の李衍に付き従って海南島の瓊海にも赴くなど、血氣盛んな人物であった。なかなか跡繼ぎに生まれなかったものの、ある晩、筍が建物を斜めに貫いて空高く伸びるさまを夢に見たため、その直後に生まれてきたわが子を應筠と名附けたといふ。^⑤ これが李日華の父である第七世の李應筠（懷莊公）である。

第三節 商業經營の成功と春波坊への進出（第七世）

李應筠は生まれつき聰明であったため、父の李惠の喜びはひとしおであった。ところがその九年後に李惠は他界し、急速に家計が傾いたため、李應筠は白苧在住の縁戚、周氏のもとに預けられることとなった。^⑥ 李日華が著した「梅墟先生別錄」上（「夷門廣牘」巻八十七所收）によれば、李日華の太姑（李日華の祖父李惠の姉妹）を娶った周翁（東庄翁）は、李應筠を引き取ると、晩年に生まれた實子の周履靖（後述）と兄弟同様に育てたといふ。^⑦ 李應筠も周翁によく仕えたため、周翁は李應筠を養子に迎え、死後に多額の遺産を残そうと申し出るほどであった。しかしながら李應筠はこのありがたい申し出を断ると、いまだ手許に残っていた先祖傳來の田地三畝を元手に、妻の吳氏とともに地道に働き続け、ようようのことで生計を立てられるようになった。^⑧ なお、妻の實家である吳氏については何の手がかりもなく、詳細については全く不明である。また、李應筠の前の妻が錢氏であった、という證言もあるが、これは後に觸れる。

李應筠は、情に厚く行いは質朴、春秋の越王勾踐に仕えた計然のごとき商才を發揮して蓄財に成功し、惜しみなく施したため、人々は有道の長者と稱賛したといふ。^⑨ 李應筠がいかなる商賣に携わっており、いかにしてその經濟的基盤を築いたのかについては、すでに「濱島一九八三」・「濱島二〇一四」によって、その一端が明らかにされている。以下、この一連の成果に基づきつつ、『味水軒日記』所載の記事を再検討してみよう。

別稿にても再び述べるが、李日華の居宅の一つは、嘉興府城の東門（春波門）の外側一帯に廣がる、嘉興縣治下の九つの坊のうちの一つである春波坊にあった。^⑩ 府城の東壁と水路一本を隔てて隣接するこの場所は、やはり商業の盛んな地區であり、李日華とその一族にとって重要な據點

の一つであった。ちなみに、春波坊にほど近い、縣城の東北二里に位置する柴場灣なる場所は、もともと燃料用の薪の集散地であったが、一六世紀末には多くの商店が立ち並び市場町となっていた²²⁾。李氏が春波坊に不動産を所有するようになったのは、李日華の父、李應筠の代からであったが、そのことが判明するのが、『味水軒日記』巻二の、春波坊で起こった火災に関する記事である。

萬曆三十八年十二月八日、春波坊の里第は火災に見舞われ、李氏が近隣の市場に所有する百餘件の賃貸物件もろとも全焼、父の李應筠が長年にわたる努力の末に築き上げた財産が烏有に歸してしまった。李日華は父の氣持ちをこれ以上傷つけぬよう、この世は幻に過ぎないのだから、などと遠回しに慰めようとしたところ、李應筠は「私はもう八十歳、これ以上資産を増やす必要もなかるう」と笑って見せたという。そしてその翌日には、使用人に焼け跡の片づけをさせている²³⁾。

〔濱島 一九八三〕(六頁)が指摘するとおり、李日華の父の代からの不動産運用による収入は、李氏の重要な財源となっており、この火災による損失は大きかったと考えられる。しかしながら、〔濱島 二〇一四〕註一五(二二九頁)ではさらに、「李家がこれによって大きな打撃を受けた節は全く見いだされず、その経営と財力が多角的であり、縦深的抗堪性を有していた」と述べられているが、その實態について、これ以上具体的なことは不明である。

また、同じく『味水軒日記』の記事によれば、萬曆四十四年七月十一日、李日華は「東津の里第」において祖先祭祀を行った²⁴⁾。地方志によれば、東津とは、嘉興府城の北東に位置する剡搭坊に屬する巷名であり、六里涇にかかる東馬橋の東側のたもとには、水路を東に向かう官船が駐節するための東津亭という施設が置かれた²⁵⁾。〔濱島 二〇一四〕は註四三(二三三頁)において、この東津について「嘉興府城東北に接する農村集

落で、父親の出身地である。そこに在った別墅Ⅱ「里第」を四季折々に訪れ、花卉・庭木等を賞でている。」と述べるが、これまでに見てきたとおり、李氏代々のルーツは雙溪および白苧にあり、後に李日華が花木の觀賞に訪れるようになる里第も、別稿にて述べるように東津ではなく白苧のことを指している。李氏と東津とのつながりを示す文章は『味水軒日記』所載のこの記事のみであるため、斷定的なことは言えないものの、あるいは李應筠がある時期から、ここに商業上の據点を置いていた可能性も考えられる。なお、この東津における「合族會祭」とその持つ意味については、別稿にて再び採り上げる。

『味水軒日記』をはじめ、李日華の著述の中には、自らの家産に関する記述はほとんど登場しないため、これ以上のことは詳らかにしえないが、當初、おそらく白苧のわずかな田産を元手に商賣に乗り出した李應筠は、商業經營が軌道に乗るにつれ、春波坊や東津など嘉興府城の東門(春波門)直近の最も繁華な商業地區にその據点を移し、不動産投資などによる資産運用をも行うようになっていったと考えられる。

そして次に述べるごとく、李應筠は、李氏一族のさらなる發展を、大事な一人息子に託すこととなったのである。

下の略地圖は、地方志所載の繪地圖および現在の地圖に基づき、本稿に登場する地名の位置関係をおおまかに示したものである。



第二章 李日華の生い立ちについて（幼少期～青年期）

嘉靖四十四年（一五六五）三月十三日の丑の刻、李應筠と吳氏との間に待望の長男が誕生した。わずか七ヶ月の未熟児であったものの、順調に成長し、早熟な才能の片鱗を見せ始めた。これが第八世の李日華である。²⁸この人物に關しては、筆者の前稿「井上二〇〇〇」をはじめ、「萬二〇〇八」などの先行研究によって多くのことが明らかにされてきているが、今回あらためて、李日華の著述の中から、嘉興における自らの居所について述べた文章を採り上げ、そこでどのような人々と關わりを持ったのか、順に見ていくこととする。

第一節 周履靖による薰陶（幼少期）

李日華が幼少期を過ごしたのは、周氏の居宅があった白苧であった。李應筠を引き取った周氏のうち、詳しい履歴が判明するのは、周翁の實子で李日華の表叔にあたる、先述の周履靖である。この人物については、すでに筆者の前稿にて述べたが「井上二〇〇〇」（一八～二〇頁）、今一度確認しておきたい。周履靖（一五四九～一六一〇）、字は逸之、號は梅墟、明末に多く登場した「山人」、すなわち自らの持つ優れた技能を元手に生計を立てる知識人の一人であった。彼は生來虚弱な體質であったため、科擧による立身出世を斷念せざるを得なかったものの、さまざまな學藝に通じ、『夷門廣牘』一百二十卷という大部の類書を出版したことで知られる人物である。彼は鴛鴦湖のほとりの梅墟に居を構えた。『殊域周咨錄』の著者として知られる嚴從簡（字は紹峰、嘉興の人）「梅墟書屋記」によれば、梅墟は、嘉興府城から鴛鴦湖の岸邊に沿って東南に五里にある白苧郷の南、桃花里の東數百歩にある梅の名所²⁹で、周履靖はここに庭園を築いて梅や竹を植え、梅顛道人と稱された³⁰。李日華「梅墟先生別錄」

上によれば、幼いころから父の李應筠に學問の手ほどきを受けていた李日華であったが、家が貧しく書籍が入手できなかったため、周履靖は自らの藏書を使って李日華に教育を施すようになった³¹。周履靖は、同居していた李應筠の息子の才能に大きな期待を寄せ、王世貞、文嘉、茅坤、屠隆、董其昌ら、親交のあった當時を代表する著名人の間で盛んにその才能について推奨して回ったという³²。

周履靖が著した「螺冠子自叙」（「梅墟先生別錄」下の卷末所收）に自ら述べているように、彼は士大夫から布衣に至るまで幅広い社會階層の人々と交際したのはもちろんのこと、神仙世界の住人たちに至るまで、その交友關係の幅廣さは現世を超えた境涯に及ぶほどであった。例えば『群仙降乩語』（『夷門廣牘』卷九十一所收）には、蘇軾や黃庭堅などの宋人や倪瓚や吳鎮などの元末四大家、沈周・文徵明・祝允明ら蘇州の諸名人、そして歷代の名高い神仙たちが、扶乩を通じて一堂に會して詩文を唱和し、さらに周履靖の友人たちが次韻した作品集である「合山一九九四」（四八〇頁）。そしてかかる交際を通じて得た詩文や、古今東西のあらゆる分野にわたる珍奇な古籍を収集し、李日華をはじめとする門弟たちの協力のもと、『夷門廣牘』所收の膨大な書籍を出版したのである。かかるありようは、明末の山人の一般的な特徴ともいえ、のちに李日華が師事することとなる陳繼儒（一五五八～一六三九）³³が、當時のベストセラーとなつた一連の『寶顏堂秘笈』シリーズを次々と出版できたのも、實務にたった嘉興の出版關係者の組織力を十全に利用しえたがためであった「大木一九九〇」（二二四〇～二二四五頁）。

李日華の人生の最も早い段階において、山人として悠々自適の生活を送りつつ、文化・藝術界における有力者との幅廣い人脈を持つ周履靖から、盛んな薰陶と後押しを受けたことは、李日華のその後の生き方に強い影響を及ぼしたのである。

第二節 馮夢禎の門下へ（青年期前半）

周囲の大きな期待を背負って舉業に勵んだ李日華は、萬曆六年（一五七八）、十四歳にして童試に合格して生員となり、同十四年（二五八六）、二十二歳の時に考試に合格して食飭、すなわち稟生となるなど、順調に優秀な成績を修めていった^④。そしてこの同じ年、李日華のその後の人生に深い影響を及ぼすこととなる、重要な人物との出會いがあった。馮夢禎である。

馮夢禎（一五四六～一六〇五）、字は開之、號は眞實居士、萬曆五年（二五七七）の進士で、官は南京國子監祭酒に至り、同二十六年（一五九八）に引退後、杭州の西湖湖畔に隱棲し、同三十五年（二六〇七）に卒した人物である。李日華は、この同郷の先輩の門下生として一層舉業に勵み、それを通じて、學術・文化・思想のさまざまな分野にわたる大きな影響を受けている。『快雪堂日記』は、馮夢禎が官界から引退して悠々自適の生活を送るに至るまでの、萬曆十五年（丁亥・一五八七）から同三十二年（乙巳・一六〇五）にかけての日々の出來事をつづった日記であり（萬曆二十年・二十二年・二十九年の三年分缺）、彼の没後に門弟の黃汝亨と朱之蕃が出版した文集『快雪堂集』六十四卷（萬曆四十四年刻本）の、第四十七卷から第六十二卷に收められている。日記中には、馮夢禎の身邊雜記を中心に、彼が深く關心を寄せる書籍・園林・戯曲・旅行など、多岐にわたる事柄が記載されている「丁二〇一五」（二頁）。馮夢禎の没後、李日華は一旦地方官の職務を離れて隱遁生活に入ったが、そのころから彼は日記を記録し始めており、のちに萬曆三十七年（己酉・一六〇九）から同四十四年（丙辰・一六一六）までの八卷分が『味水軒日記』としてまとめられた。おそらく師の馮夢禎にならい、没後の公開をも念頭に置きつつ、自らの趣味生活全般に關する事柄をつづいたのであろう「鄒二〇一八」

（三〇五～三〇六頁）。

兩者の日記や文集を比較すると、李日華が馮夢禎から影響を受けた部分がいろいろと見えてくる。中でも重要なのが、佛教への深い傾倒と、禪宗の僧侶たちとの交友である。馮夢禎は、萬曆年間に活躍した高僧である雲栖株宏（一五三五～一六一五）や紫柏真可（一五四三～一六〇三）らと親交を結び、嘉興の士人の代表者として彼らの活動に協力・援助を惜しまず、楞嚴寺における方冊形式のいわゆる嘉興版『大藏經』（嘉興藏）の出版に盡力した「鄒二〇一八」（八九～一〇〇頁）。そして杭州に隱棲後も、西湖の周囲にある多くの佛寺を經巡っては僧侶たちと交遊する毎日を送っていた。李日華も師に倣って若いころから紫柏真可のもとに參禪し、そのほかにも多くの僧侶たちとの交遊を通じて、禪理と佛典に對する理解を深めていくこととなる。

第三節 書畫骨董趣味への開眼

馮夢禎から李日華への影響として、もう一つ重要なのは、書畫骨董の収集と鑑賞である。『快雪堂日記』の記述によれば、馮夢禎が本格的に書畫骨董を収集し始めたのは、南京の國子監に赴任した後の、萬曆二十年ごろからであった。陪都として江南の政治・文化の中心をなす南京において、國子監司業、そしてのちに祭酒を務める立場であつてみれば、宮中をはじめさまざまなところに所藏される傳世の書畫骨董の名品に巡り逢う機會は、他の人々に比べて格段に多かったためであろう、萬曆二十年（一五九二）から同二十六年（一五九八）にかけての南京滞在時期に、馮夢禎は宋拓《高宗臨二王帖》（萬曆二十一年五月二日條）、李思訓《長江六月圖》（萬曆二十一年五月五日條）、王維《江山雪霽圖卷》（萬曆二十三年二月十日條）、舊本《淳化閣帖》（萬曆二十四年十一月六日條）など、數々の法書名畫を入手、とりわけ王維《江山雪霽圖卷》が董其昌（一五五五～一六三六）

の絶賛を博すると、コレクターとしての馮夢禎の名聲は一舉に高まった。しかしながら、『圖繪寶鑑』などの記事に基づくカタログ的知識に頼って理解する場面も見られるなど、のちの李日華と比較すると書畫の鑑賞能力の水準はあまり高くなかったようで、馮夢禎のコレクションの眞偽についてはかなり疑わしいところがある、とは「萬二〇〇八」（五七頁）の指摘である。實際、父親よりも書畫骨董の鑑定に秀でていた長男の馮權奇に相談する場面も、『快雪堂日記』中に登場する（馮權奇については別稿にて述べる）。とまれ、のちに王羲之《快雪時晴帖》までをも入手した馮夢禎のもとに出入りした李日華は、師を通じて書畫骨董のコレクションに本格的に開眼していったのである。

そもそも馮夢禎に弟子入りする以前から、李日華は書畫骨董の鑑賞に對して興味を抱きはじめていたが、それは、最初に教えを受けた周履靖からの影響によるものであった。周履靖もまた、自宅の書齋に數多くの書畫骨董を集めては、それらを鑑賞して楽しんでおり、幼き日の李日華は、そのような彼の姿に日々親しく接していたためである。李日華はのちに當時を代表する書畫骨董の目利きとして全国的な名聲を博するに至るが、かかる一流の鑑賞家として成長していく上で、同郷の項元汴とその一族の果たした役割は決定的なものがあつた。

「沈二〇一二」・「葉二〇一三」・「封二〇一三」など、既に多くの先行研究によって明らかにされているとおり、項氏は嘉興を代表する望族の一つであり、項元汴は、ありあまる資産にものをいわせて膨大な量の書畫骨董を購入し、おそらくは中国史上最大級の個人コレクションを形成した人物である。嘉興府城内の靈光坊に築かれた天籟閣に收藏されたそのコレクションたるや、質・量ともに他の追隨を許さず、現在でも、世界各地の美術館・博物館に所藏されている書畫の傳世品のうち、重要な作品の大半には項元汴の收藏印が捺されていると言われている。そして

彼の子や孫の世代からも、かかる家庭環境の下、高い藝術的素養を身につけた人物が多く登場したが、別稿にて述べるように、彼らはいずれも李日華と密接な交友關係を持つことになる。そして李日華自身も、青年期から項元汴のもとを出入りし、彼が所有する膨大なコレクションにアクセスし、超一級品の鑑賞を通じてその眼力を養うことができたのである。「井上二〇〇〇」（六〇七頁）。

李日華がいつ頃から項元汴のもとを訪れるようになったのか、残念ながらそれを明確に示す資料はないものの、「萬二〇〇八」（二二五―二二八頁）が指摘するとおり、父の李應筠が、すでに項元汴と親しい關係にあつたことがうかがえるものが存在する。『味水軒日記』によれば、萬曆三十七年十一月三日、李日華は項元汴の三男の項德新（一五六三―？）から、母の陸氏が還曆を迎えた記念の文章を依頼され、潤筆料として數點の書畫骨董を受け取っている。そのような経緯で記されたのが「壽項母陸孺人六表序」であり、そこには、李日華が幼いころ、父と項元汴が親しく談笑し、酒を酌み交わしつつ興にまかせて詩文を書き附ける様を見ていたこと、生員となった十四歳の折に、お祝いとして自作の《玉樹圖》を渡されたこと、などが思い出として記されている。李日華によれば、父の李應筠は、佛教書を讀むのは好きだったが、僧侶と交際するのは喜ばなかつたそうである。おそらく李應筠は、佛教に深く通じた在家の居士である項元汴に、かねてから親交のあつた周履靖を介して知り合つたと思われる。

ここで想起されるのが、汪何玉の父の汪繼美である。筆者が前稿にて述べたとおり「井上二〇一七」（一三三頁）、汪繼美は李應筠と同じく、商業によって身を起し蓄財に成功するかたわら、佛教を通じて項元汴をはじめとする地元の名士との間に人脈を廣げ、息子に十分な教育を施して科擧合格による立身出世を期待するなど、兩者には共通點が多い。ま

た、項元汴との交際を通じて、汪繼美は書畫骨董に對する興味關心も有していたが、李應筠も同様であった可能性が高い。のちに李日華が鑑賞家としてその一步を踏み出して行くにあたって、父の代からの項氏とのつながりは、注目すべきものであるといえよう。

第四節 結婚そして進士及第

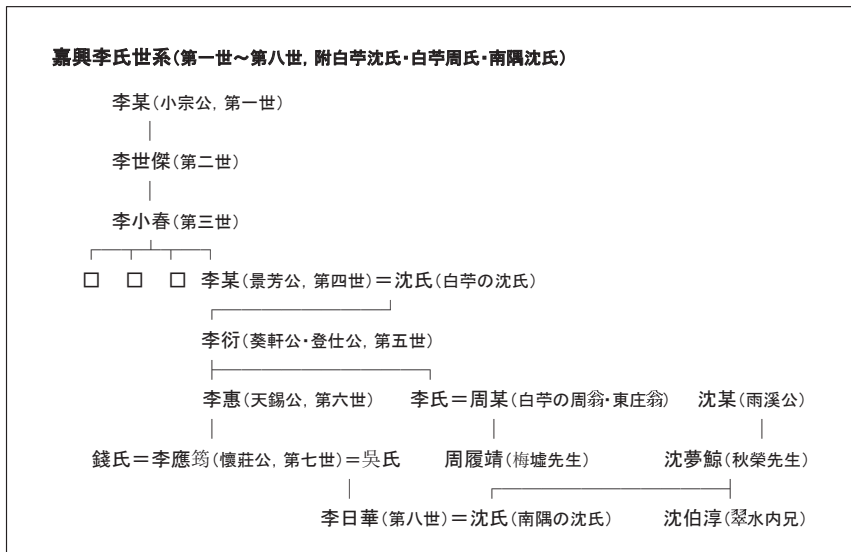
正確な時期は不明であるものの、おそらく二十代前半の時期に、李日華は、南隅の沈氏を娶っている。南隅が秀水縣治下のどのあたりにあったのか、正確な位置は不明である。李日華の記すところによれば、南隅の沈氏は、もともと湖州にある吳興の沈壽三（國支公）の末裔であるが、事跡が明らかとなるのは李日華の妻となった沈氏の祖父、雨溪公（諱は不詳）からである。雨溪公は貧民救済などの善行によつて隱徳を積み、ある日、夫婦に不思議な夢や現象が現れ、やがて息子が誕生したという。これが李日華の舅にあたる沈夢鯨、號は龍門、菊の栽培の名人であったことから秋榮と稱した人物である。彼は苦しい經濟狀況のもと、必死で家族を支え続けるかたわら、學問に勵んで「南隅之傑」と稱されるほどその名を知られるに至る。沈夢鯨は錢氏を娶り、李應筠の前妻も別の家系の錢氏であったことから、兩者は「僚壻」と稱して兄弟づきあいをする間柄であり、李日華の縁組みも父が凝っていた卜筮によつて決められたという^③。しかしながら、この南隅の沈氏も、おそらくは進士及第者を一人も出したことのない家系であり、これまでの李氏一族とほぼ同じような家格・境遇であったと推測される。

また、『味水軒日記』をはじめ、李日華の隨筆中には沈翠水なる人物が頻出する。筆者の前稿「井上二〇一一」註七六（四二頁）においても簡單に紹介したが、彼の諱は伯淳、翠水はその號である。嘉靖四十年（二五六）の生まれで、李日華がしばしば彼を「内兄」、つまり妻の兄と

呼んでいることから、沈夢鯨の子の一人である。李日華との會話において、數え年で五十四歳を過ぎてから續けて二人の子供を授かったため、學業のための書物はことごとく焼き捨てて悠々自適の生活を送るつもりなので、お前もつきあつてはくれないか、などと述べており、おそらく終生官途に就くことはなかったとみられる^④。沈翠水は父と同じく園藝の達人であり、盆栽から庭木に至るまで數多くの植物を自宅で栽培した。李日華は、彼の自宅の庭園を訪ねて季節の花々を鑑賞したり、秋にはともに連れだつて嘉興の菊の名所を訪ね歩いたりしている。また沈翠水は、可月齊なる書齋において書畫骨董の収集と取引を盛んに行うかたわら、自作の畫冊を蘇州の醫者に贈るなど、自らも詩文書畫をよくする多才ぶりをも發揮している。この點については、趣味を同じくする李日華もその實力を認めており、沈翠水の求めに應じて、董源の筆意に倣つた《秋林釣艇圖》を描いて與えたり、盛堯民なる畫士のために「吳淞歌」を作つたりしている^⑤。おそらくは實際の書畫の賣買や潤筆料の授受に關して、兩者はかなり密接な協力關係にあつたのであろう。また、南隅の沈氏が、園藝をはじめとするさまざまな技藝を元手に、地元の名士の間に交遊の範圍を廣げていくことにより、社會的地位の確立を圖っていた様子が見て取れる。

そしてついに、李日華自身が念願の科擧合格を果たす。萬曆十九年（一五九二）、二十七歳にして浙江鄉試に挑んで擧人の資格を得た彼は、翌年に連捷、三甲二十二名にてついに進士及第を果たすのである^⑥。李日華が自ら語っているとおり、李氏一族からはいまだ正途によつて官僚身分を獲得した者がおらず、進士及第は、なにより父の李應筠の宿願でもあつたのである。その後の官界での出世については、決して芳しいものとはいえなかつたものの、ここで進士身分を獲得したことにより、李日華および彼の一族は、いよいよ嘉興の望族としての出發點に立つことができ

たのである。またこの後、青年期に學問や藝術を通じて培った馮氏・項氏をはじめとする嘉興の名士たちとその一族との人脈が、李日華の名聲を高めていく上で、極めて重要な意味を持つことになっていくのである。最後に、第一世から第八世までの李氏の系譜と、婚姻関係を結んだ氏族についてまとめた「嘉興李氏世系」を、左に示す。



むすびにかえて

嘉興移住後に李氏のたどった歴史を概観してきた。かれらはまず農村から都市近郊へと移動して發財の機會をつかむと、同じような立場にあった在地の氏族と婚姻関係を結ぶことによって、そこに定着していった。そして農業經營を通じて資本を蓄え、下級の官位を獲得して社會的地位の上昇を圖った。そののち、挫折を経つつも、さまざまな商業分野に進出して城市に近接する商業區域へと移り住み、そうして蓄えた資本を元手に、在地の有力者とのコネを持つ氏族と婚姻関係を結ぶと、子弟に教育を施して科擧に合格させ、さらなる社會的上昇の機會をつかむことに成功したのである。これは、明代中期以降、經濟の最先進地域であった江南における商業ブームに乗って、農村から都市へ、農業から多角的商業經營へと乗り出し、數世代を経たのちに科擧を通じて官界に進出するという、當時の社會に廣く見られた典型的なサクセスストーリーであったといえよう。

そして李日華は、地元の嘉興における新興の望族としての地位を確立し、それを永續させるべく、ようやくにして獲得した士大夫官僚としての立場を活用して、同じく進士を輩出した氏族との婚姻を進めていくこととなる。そして同時に、自らの持つ詩文書畫に關する能力を活用し、嘉興における文化的傳統の繼承者・主盟者として、盛んに人脈を廣げていくことによって、舊來の望族に對抗し、独自の地位を確立しようとする努力を重ねていくことになる。李日華がいかにして宗族の範圍を廣げていったのか、また晩年に至って「春波里人」としてのアイデンティティを確立していった裏にはいかなる狙いがあったのか、これらのことについては、稿をあらためて検討していきたい。

【註】

- ① 光緒『嘉興府志』卷十五「古蹟」二「園宅」嘉興縣「明」
恬致堂、太僕李日華之第、在春波門外螺螄濱。日華嘗具疏乞歸時、烹
廟稱其孝思恬致可嘉、因以名堂、又有六軒齋、紫桃軒。
- ② 李日華「乞言壽家君引」
迨不肖日華生五六齡、輒抱膝上、：已又從故紙束中出先朝勅一通、知
餘家蓋宋承務郎淳之後。淳爲侍郎忠愍公次子、初貫洺州、隨蹕來吳越、
散布鹽官、饗兒、鵝湖、魏塘。
- ③ 李日華「乞言壽家君引」
其家郡城甬里街雙溪橋、則始於小宗公。
- ④ 崇禎「嘉興縣志」卷一「山川」
漢塘、在縣東南一十五里。按『新唐書』地理志：海鹽註云、西北六十
里有漢塘、泰和七年開。然自海鹽西北直通嘉興、故總爲漢塘。今又名新
豐塘。〈相傳、漢新豐人遷于汴、汴又遷于此、故塘名漢塘、鎮名新豐。〉
光緒『嘉興府志』卷十二「山川」一
漢塘、：此塘、自海鹽西北直通嘉興、故總爲漢。〈『伊志』案、爾時、
未析平湖、故屬海鹽也。〉
- ⑤ 光緒『嘉興府志』卷十二「山川」一
魏塘、華亭塘通松江府華亭縣。〈『至元志』、今俗呼嘉善塘。〉『嘉興湯
志』、魏塘河、亦名武塘。
- ⑥ 崇禎「嘉興縣志」卷一「山川」
雙溪、在縣東六里、以近漢塘、魏塘故名。
- ⑦ 李日華「乞言壽家君引」
魏塘至今有李村。
- ⑧ 崇禎「嘉興縣志」卷三「橋梁」所引「重建牙前橋碑」
我禾郡、托夷陸民、什七秉耒、什三業遷引、而百貨所萃、莫盛于郡城
之東隅、裨販之家、操奇贏以化居、遠近歸市者、肩相摩而趾錯也。南北
阻一衣帶水、駕橋如虹、名曰熙春、又曰牙前。
- ⑨ 崇禎「嘉興縣志」卷一「山川」
舟之達于松江者、由此溪。
- ⑩ 李日華「乞言壽家君引」
- ⑪ 小宗生世傑、世傑生子春。
李日華「乞言壽家君引」
子春四子、餘祖居其季、曰景芳公。景芳公贅白苧之沈、因爲白苧人。
- ⑫ 崇禎「嘉興縣志」卷一「山川」
白苧堰、在縣東南三里。
光緒『嘉興府志』卷五「橋梁」嘉興縣〈城外〉
白苧橋、在縣東二十里、跨於苧溪。〈『柳志』。俗呼堰橋。〉『吳志』。
- ⑬ 光緒『嘉興府志』卷十五「古蹟」二「園宅」嘉興縣「明」
獨柞軒、徐一夔居白苧里、牖外有一大柞。〈『吳志』、徐一夔「獨柞軒
記」。〉
- ⑭ 李日華「乞言壽家君引」
生葵軒公、公衍所謂登仕公也。世世耕農、至登仕公、以明習法令、推
擇赴部得官、即今所謂清吏者也。
- ⑮ 譚貞默「明中議大夫太僕寺少卿李九疑先生行狀」
傳葵軒公衍、讀律推擇得官登仕郎、司廉州巡篆、有最績。
- ⑯ 李日華「乞言壽家君引」
天錫公少慕義任俠、從大王父登仕公官瓊海、匹馬往來千里、出則仗
劍、無敢難者。晚益嗜酒拓落、又艱舉子、居恒悲思。一夕、夢筍穿屋斜
出、亭亭干霄。喜曰、「吾有子矣。」俄庶薛舉家君。
- ⑰ 李日華「乞言壽家君引」
家君生而秀慧、甫識言笑、即得天錫公歡。
譚貞默「明中議大夫太僕寺少卿李九疑先生行狀」
無何、天錫公捐館舍、家君纔九齡、瑩瑩茹茶、產日蕩析、遂依姑之適
周者。
- ⑱ 李日華「梅墟先生別錄」上
先生餘外從父也。家君少孤、先生爲晚年子、而俱寡兄弟、以故相倚爲
同家驩。：先生父爲東庄翁、而母李氏即餘太姑也。
- ⑲ 李日華「乞言壽家君引」
姑父周翁性嚴、家君事之謹。主出入、不私一錢。有緩急、身先赴之。
周翁謂若子真吾子也。議更姓、家君泣辭。又曰「吾死、必厚遺若。」然
家君竟無厚覬也。是時尚有祖遺田三畝奇。家君拮据勤生、與吾母吳孺人

- 稍稍營儲、粗備伏臘矣。
- ⑳ 譚貞默「明中議大夫太僕寺少卿李九疑先生行狀」
惇性質行、託計然策、致贊樂施、里稱有道長者。
- ㉑ 崇禎「嘉興縣志」卷三「坊巷」
春波坊（東至蒯党搭坊、西至官河、南至宣公坊、北至三板坊）。大虹橋巷 小虹橋巷 栲栳街。
- ㉒ 崇禎「嘉興縣志」卷一「山川」
柴場灣、在縣東北二里、舊名草場灣。柳志云、相傳、市薪者皆萃于此、故名。（今傍灣皆市、販僧互櫛比鱗萃、即云薪桂未許居停、僅有數家推架松標、不失舊意耳）。
- ㉓ 「味水軒日記」卷二·萬曆三十八年十二月八日條
春波舊第連市廛取稅房大小百餘間、沿燒悉盡。家君一生拮據所就、蕩然矣。恐重傷親意、以世界浮幻之說、曲譬相慰。家君慨然曰、「吾年八十、豈復須厚殖乎。」談笑殊自若。
- ㉔ 「味水軒日記」卷二·萬曆三十八年十二月九日條
督諸僮理煨燼。
- ㉕ 「味水軒日記」卷八·萬曆四十四年七月十八日條
中間、惟七月十一日、合族會祭始祖唐西平忠武王、祧祖宋侍郎忠愍公、觀文殿學士曾伯公於東津里第、昨飲驩甚。
- ㉖ 崇禎「嘉興縣志」卷三「坊巷」
蒯搭坊（東至六里坊、西至宣公坊、南至官河、北至三板官河）。蒯搭街 西馬巷 雙元巷 慶元巷 天馬巷 東津巷 黃家廊。
- ㉗ 光緒「嘉興府志」卷二十八「郵傳」嘉興縣
東津亭、在蒯搭坊東馬橋東、水次東道駐節之所（『浙江通志』、按『柳志』有臨津亭）。
- 光緒「嘉興府志」卷五「橋梁」嘉興縣（城外）
駟馬橋、在縣東一里半（『柳志』）。呂太常嘗以鄉民入市、艱於跋涉、因建此橋、取乘駟馬車之義（『鄒志』）。今名東馬橋、南塊爲王家坊（『嘉興湯志』）。天啓二年、里人倪繼宗修（『嘉興何志』）。
- ⑳ 譚貞默「明中議大夫太僕寺少卿李九疑先生行狀」
先生母吳恭人腹先生七月而生、生無因地聲、既彌月、仰席臥、適器水滴面、驚乃呱、人詫爲異。稍長、有至性、章句如夙習、經目輒覆不忘。援筆能文、尤喜閱史、漢大節目、事不去手。
- ㉑ 嚴從簡「梅墟書屋記」（『夷門廣牘』卷八十八所收「梅塢貽瓊」卷五「記」）
去橋李郭東南、遶湖而行五里許、曰白苧鄉。又南爲桃花里、東數百武、竹石若障、亘湖沆漭、不見水端、地僻多梅、人稱爲梅里云。
- ㉒ 盛楓「嘉禾徵獻錄」卷四十七「隱逸」周履靖
周履靖、字逸之、號梅墟、嘉興人。少患羸疾、屏去經生業、博涉子史百家言。所居編茅引流、雜植梅竹、讀書其中、自號梅癩。
- 光緒「嘉興府志」卷十五「古蹟」二「園宅」嘉興縣「明」
梅墟、周履靖、萬曆中布衣、築舍鴛湖之濱、種梅百餘株、時咿唔其下、人呼爲梅顛道人（『橋李詩繫』）。
- ㉓ 李日華「梅墟先生別錄」上
餘乳哺時、家君子置餘膝上、口授「大學」、率能成誦。六歲始識字、七歲始讀書。十二而屬文、是時亦知好古矣。以家貧、無所得書、先生悉出所藏書教餘、後即讀書于先生晴雪齋中、益得親先生言論。
- ㉔ 盛楓「嘉禾徵獻錄」卷四十七「隱逸」周履靖
與王世貞、皇甫汸、文嘉、劉鳳、徐中行、吳國倫、茅坤、屠隆、董其昌爲莫逆交。年九十一卒。太僕李日華、幼與履靖比屋居、撫之曰、「他日文章風雅宗也。」日延獎名公卿問。
- ㉕ 譚貞默「明中議大夫太僕寺少卿李九疑先生行狀」
先生：攷藝則師眉公陳徵君。
- ㉖ 譚貞默「明中議大夫太僕寺少卿李九疑先生行狀」
十四歲、遊子衿、二十二歲、食餼。
- ㉗ 譚貞默「明中議大夫太僕寺少卿李九疑先生行狀」
先生質經則師具區馮司成。
- ㉘ 李日華「恬致堂集」卷二十二「序」「壽項母陸孺人六表序」
餘幼侍家人燕凡、猶及見墨林先生。抵掌談笑、逸思橫發、觥籌之餘、抽染毫素、以寄勝情。餘方舞籥游膠庠、先生爲作《玉樹圖》、貽家山人言賀。至今櫝藏之、意非不洒洒向慕也。
- ㉙ 李日華「乞言壽家君引」
居恆喜讀佛子書、不樂與佛徒游。

③⑧ 李日華『恬致堂集』卷二十四「傳」「秋榮先生傳」

先生姓沈氏，諱夢鯨，號龍門，生平制行大略如客談，而藝菊更號，則其所自託云爾。…南隅沈本吳興國支公諱壽三者，…而餘婦翁秋榮先生，則南隅之傑也。…公寬然長者，振貧濟乏，篤修隱君子之行，…又咸謂公樹德於隱，後當有顯者。公一夕夢入異境，清波湛然，金鯉躍出。夫人僉獨坐帳中，見流光如星墮懷，而舉先生。…雨溪公中年幾絀世網，先生彈力百計脫之。撫弱弟稚妹，須其成長，罄橐婚嫁，無少靳惜。居恆績學潔行，多長者聞達之游。…先生娶於錢，餘前母亦錢，與家子稱僚壻，有兄弟之好。家君初爲餘卜婦，發十餘筭而吉者三，其二皆饒貲里中豪也。家子曰，沈氏實有令聞，何饒如之。乃決委禽焉。

③⑨ 『味水軒日記』卷七·萬曆四十三年正月二日條

細雨。沈翠水來，與飲竟日。去翠水年五十四初艱子，今連舉二子。餘以春聯贈之云，春雨蘭芽雙引玉，晴霞芝草遍鋪金。翠水曰，餘至是且將盡焚干祿書，閉門灌花，竹令生意，鬱然不斷，日攤神官襍說，其下縱酒笑歌，以達此生。子能從我乎。餘曰，諾。

④⑩ 『味水軒日記』卷六·萬曆四十二年十一月二十九日條

寒雨。沈翠水自寫畫冊，贈姑蘇醫隱張九嶺，要餘著語。餘既被酒，漫應之。

④① 『味水軒日記』卷四·萬曆四十年閏十一月十一日條

爲沈翠水寫《秋林釣艇圖》，做董北苑筆。

④② 『味水軒日記』卷二·萬曆三十八年二月二十五日條

陰寒。作「吳淞歌」贈盛堯民畫士，從沈翠水請也。

④③ 譚貞默「明中議大夫太僕寺少卿李九疑先生行狀」

萬曆十九年辛卯，先生年二十七，舉于浙，出自郝公楚望之門。…越春壬辰成進士。

④④ 李日華「乞言壽家君引」

蓋未有以儒顯者。家君乃始篤意以儒術教不肖，不肖幸收有司，以克遂家君之初念。顧材既涼薄，性復頹惰，不可鞭策，虛要國恩，無一建樹，將遂碌碌不克振，則所負家君之教萬萬。且顯揚之謂何。

參考文獻一覽

《日文》

〔井上二〇〇〇〕

井上充幸「明末の文人李日華の趣味生活―『味水軒日記』を中心に―」『東洋史研究』第五九卷第一號

〔井上二〇一七〕

井上充幸「『竹嬾茶衡』拾遺―明末の文人李日華の喫茶生活―」（西村昌也編『東アジアの茶飲文化と茶業』周縁の文化交渉学シリーズI、關西大學文化交渉学教育研究據點）

〔井上二〇一七〕

井上充幸「王柯玉の生涯―『珊瑚網』から見る明末の嘉興における文雅について―」『立命館東洋史學』第四〇號

〔大木一九九〇〕

大木康「山人陳繼儒とその出版活動」『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』下、汲古書院

〔合山一九九四〕

合山究「明清の文人とオカルト趣味」〔荒井健編『中華文人の生活』平凡社〕

〔濱島一九八三〕

濱島敦俊「明末清初の均田均役と郷紳（其の四）―李日華『味水軒日記』をめぐる―」『史朋』一六號

〔濱島二〇一四〕

濱島敦俊「明代江南は「宗族社會」なりしや」〔山本英史（編）『中國近世の規範と秩序』研文出版〕

《中文》

〔丁二〇一五〕

丁小明「真實居士的真實言（代序）」〔馮夢禎『快雪堂日記（修訂本）』鳳凰出版社〕

〔封二〇一三〕

封治國「與古同游―項元汴書畫鑒藏研究―」中國美術學院出版社

〔龔二〇一七〕

龔肇智『嘉興明清望族疏證』方志出版社

[潘一九四七]

潘光旦『明清兩代嘉興的望族』商務院書館

[沈二〇一二]

沈紅梅『項元汴書畫典籍收藏研究』國家圖書館出版社

[萬二〇〇八]

萬木春『味水軒里的閑居者——萬曆末年嘉興的書畫世界——』中國美術學院出

版社

[葉二〇一三]

葉梅『晚明嘉興項氏法書鑒藏研究』中國社會科學出版社

[鄒二〇一八]

鄒定霞『馮夢禎研究』四川大學出版社